

---

# コーディネイト

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コーディネイト

### 【Nコード】

N8053E

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

花も実もあるインテリアデザイナー瀬戸香苗。ところが唯一の弱点は風采の冴えない夫。この夫を何とかしようとしたら物凄いことに。家庭コメディです。

## 第一章

### コーディネイト

インテリアデザイナーの瀬戸香苗には色々な自慢があった。まずは自分の家だ。

「どうかしら、この家」

「うわっ、奇麗」

「お城みたい」

「自分でデザインしたのよ」

にこりと笑って誇らしげな顔でいつも家に招いた友人達に対して言うのだった。家は白を貴重とした十九世紀のイギリスの家をイメージしたもので庭には緑の草木と赤や白の花がいつも咲き誇っている。その草木や花々が左右対称に飾られている。そして庭だけではなかった。

家も同じだった。左右対称を念頭に設計され窓の様式も西欧風だ。木の窓が実にお洒落だ。

内装もまた立派だった。全て床張りで玄関からトイレに至るまで全て奇麗に飾られ掃除も行き届いている。キッチンも豪華な設備を見せており何の欠点もない見事な家である。

「立派よ、立派」

「香苗の服だつて」

「ふふふ、そうかしら」

それを褒められてさらに気分をよくさせる。髪はショートボブにして黒い髪の潤いを保っている。肌には気を使い三十代後半なのに皺一つない。すらりとした長身で知的な目に紅い唇を持っている。いつも微笑んでいる感じで表情を保っている。眉も少し吊りあがり気味の目に合わせて奇麗に描いている。また白いズボンのミリタリー調のスーツで身を包んでいる。

「よく似合ってるわ」

「それにまだ若くて」

「何言ってるのよ、歳は変わらないわよ」

こうは言っても嬉しいのは事実だ。

「それはね」

「お子さん達だってねえ」

「ねえ」

子供は二人だ。長男の幸一と長女の春香だ。実は阪神ファンなので息子の名前はこうしたがそこには名前の元の選手の顔がよかったせいでもある。

「美男美女で」

「いい感じじゃない」

「息子さんはもう中学生だったっけ」

「ええ、そうよ」

にこにこ笑って応える。勉強もスポーツもできて顔もいい自慢の息子だったりする。

「それで娘さんもね」

「もう六年よ。手がかからなくて何よりよ」

こちらもまた美少女で知られている。いつもイギリス調の綺麗な服を着せている。まるで人形のように可愛らしくやはり彼女の自慢なのだ。

「女の子のあの年頃って難しいって聞いていたけれど」

「何か羨ましくなるわ」

「全く。何か何でもかんでも綺麗な中であって」

「羨ましいわ」

「褒めたって何も出ないわよ」

紅茶を片手ににこやかに笑いながら言葉を返す。やはり内心では嬉しい。今手にしているティーカップはゴイセンだ。やはり選んでいる。

「出てるじゃない」

「何が？」

「この紅茶と」

紅茶はイギリスから特別に取り寄せたものだ。

「お菓子も。ザツハトルテよね」

「自分で作ってみたのよ」

実はお菓子作りが趣味なのだ。甘いものは大好きだ。

「どうかしら」

「いいわ、デコレーションも立派だし」

黒いチョコレートの上に銀色の砂糖やホワイトチョコで色々書いている。ドイツ語だ。その周りにクリスマスケーキの様に色々なデコレーションを置いているのだ。

「味もいいしね。何でも綺麗だからいいわ」

これが香苗の評判だった。彼女はとにかく綺麗なものが好きでいつもそれに囲まれていた。しかしそんな彼女にも一つだけそうではないものがあった。

「おい、飯」

「はいはい」

キッチンにのそつとした感じで出て来たのは黒いジャージを上下に着てぼさぼさ頭に眼鏡の太った中年の男だった。如何にも今起きてきたという感じだ。

「もうできているわよ」

「メザシか？」

「メザシってねえ」

今の彼も言葉にむっとした顔で応える。

「お昼よ。お昼で何でメザシなのよ」

「食えればいい」

だが彼はぶっきらぼうにこう言うのだった。

「それでいい」

「それでいいってあなた」

うんざりした顔になって彼を夫と呼んだうえでまた言う。

「ちゃんと味にも栄養にも気を使って作ってるから。お昼だって」

「そうなのか」

「そうよ。お家にいる時はね」

そのうんざりとした顔で述べる。

「私いつも考えて作ってるじゃない」

「まあだつたらいいけれどな」

「ええ。それであなた」

「何だ？」

半分寝たような顔の夫に対してまた声をかけた。夫は今ゆっくりとテーブルに着いていた。

「原稿は書き終わったの？」

「まあな」

ぶつきらぼうな返事であった。

「後は送るだけだ」

「そう。じゃあ後は」

「食って寝る」

またぶつきらぼうな返事が香苗にかけられた。

「疲れたからな」

「ちよつと、そんな生活していたら」

香苗は眉を顰めさせて夫に対して言う。

「太るわよ。身体にもよくないし」

「いい」 10

「いいって。そんなのだから」

「そこまで太っていないからな。じゃあ飯は勝手に食うから」

「全く」

結局一人で食べ終える夫だった。香苗はそんな彼をうんざりした顔で見っていた。そうして遂にたまりかねたように口を開くのだった。

「全く。最近酷くない？」

「酷いって何がだ？」

「結婚した頃ってこんなのじゃなかったじゃない」

こう彼に対して言うのだった。顔を見上げた夫に対して。

「すらりとしていてハンサムで。服だっけいつもワイルドなので決めていて」

「そうだったのかな」

「そうよ。それがどうしてよ」

「またうんざりした顔で言ってきた。」

「こんなにぶくぶくって」

「仕事に関係ないからな」

「それでも夫は言う。無造作に近くにあるものを食べながら。」

「だからどうでもいい」

「どうでもいいって」

「書ければそれで生きていける」

彼は言った。

「容姿なんか関係ないだろ」

「そうは思わないけれど」

「御前はインテリアデザイナーで俺は小説家」

言葉も無造作になっていた。

「小説家の瀬戸政行でな」

「瀬戸政行は美男子小説家じゃなかったかしら」

「昔の話だ」

「こつ言われても言葉を変えない。態度も。」

「表に出ることもない。気にすることはないさ」

「そうかしらね。何か面白いくない考えに思えるわ」

「格好変えたら何か変わるのか？」

「変わるかも知れないじゃない」

香苗は政行に対して述べた。それでもとといった感じで。

「やってみなくちゃわからないわ」

「やって作品が面白くなるならやってやるぞ」

言葉にはそんな筈がないだろうという考えがはっきりと出ていた。それを隠すつもりもなかった。どうでもいいという感じの言葉になっていた。

「幾らでもな」

「わかったわ。じゃあまずは証拠持って来るわね」

半分売り言葉に買い言葉になっていた。こうなっては香苗も引くわけにはいかなかった。

「その時は。覚悟しておいてね」

「覚悟するものがあればな」

返事は相変わらずであった。やはり全然意に介してはいない感じだ。

「やってやるさ」

「その言葉、忘れないでね」

こう念を押してから彼女の戦いがはじまった。まずは政行をその気にさせる根拠を探し出す。それ自体はすぐに見つかったのだった。

## 第二章

「はい、これ」

「これ!？」

また原稿を脱稿して無造作に食べ続けている政行に対してファイルを出す。そこには細かい文字でワープロで色々と書かれていた。

「これか。その根拠は」

「そうよ。痩せて格好も引き締めればね」

「ああ」

「作品もそれにつられて引き締まるらしいわよ」

そう政行に対して述べるのだった。

「そのことがちゃんと書いてあるから」

「そうか。これか」

「そう。これで根拠は出したわよ」

夫の前で腰のところ両手をやって仁王立ちしての言葉だった。

「さっ、わかってるわね」

「シエイプアップか」

「違うわ」

政行のシエイプアップという言葉は否定した。

「コーデイネイトよ」

「コーデイネイト!？」

「そう、それ。コーデイネイトしてあげるわ」

こう政行に対して言うのだった。

「それでいいわよね」

「コーデイネイトか」

「何から何まで全部変えてあげるから」

強い決意に満ちた言葉であった。

「いいわよね」

「で、俺はどうすればいいんだ?」

「まずスポーツ」

最初はそれだった。

「結婚する前はかなり運動もしていたわよね」

「そういえばそうだったっけ」

意気込む香苗とは正反対に無気力に満ちた政行の返答だった。

「覚えてないな」

「毎日まずはランニング」

「ああ」

「それと筋トレね。毎日欠かさず」

「わかった、まずはそれだな」

「あれっ、嫌じゃないの？」

政行がやけにあっさり従ってきたのでこれは拍子抜けだった。

「てつきりもつと嫌がると思ったのに」

「嫌がるも何も約束だからな」

それでということらしかった。

「だからそれでいいさ」

「そうなの。律儀ね」

夫の性格は知ってはいたがそれでもだった。だがすぐに気を取り直してまた言う。香苗も香苗でかなり元気のいい性格だと言えた。

「で、まあそれでね」

「次は何だ？」

「今あなた夜と昼の生活が逆転しているわね」

「小説家だからな」

小説家や漫画家はどうしてもそうした生活になってしまう。これはある種宿命めいたものがあつた。だが香苗は今度はそれを言ってきたのだ。

「それを朝起きて夜寝る生活に変えて」

「それか」

「できる？」

「目覚ましがあればな」

「ということだった。」

「できるさ」

「できるの？」

「約束だからな。やるさ」

「本当にあっさりしているわね」

「つくづく自分の夫のそのあっさりとした態度に唸るのだった。」

「まあそれはそれでやり易いけれど」

「その方がいいんならな。やるさ」

「そう。それでね」

夫の言葉にとりあえずは頷きながら話を進める。

「食べ物はそのまま」

「それでいいのか」

「生活はそれだけよ。後は」

「後は！？」

「私の仕事よ」

両手を腰にやったその姿勢で宣言してみせたのだった。

「だから任せて」

「御前の仕事って何だ？」

「だから。インテリアデザイナーよ」

「そうだな」

これはもうわかっていた。

「インテリアは総合芸術よ」

「まるでオペラみたいだな」

「オペラに匹敵するわ」

彼女は少なくともこう思っているのだった。

「だからね。いいわね」

「俺がシェイプアップするのはいいとしてだ」

これは彼にもわかった。

「しかし。御前の今の言葉はわからないぞ」

「わからないのはいいけれど任せて」

香苗の言葉は変わらない。自信も。

「それはね。いいわね」

「まあ俺も腹を括ったからな」

彼はもうこれでいいのだった。

「別にそれでいいけれどな」

「随分男前ね」

香苗は彼のその潔さを見て述べた。

「そうか？」

「とにかく任せてね。いいわね」

「ああ、わかった」

こうして彼のコーデイナイトがはじまるのだった。政行は政行でシエイプアップに励んでいた。そして香苗はまずは彼にジャージではなくカジュアルな服をプレゼントしたのだった。

「これは」

「どう、この服」

もう段々引き締まってきた政行に対して言ってみせる。

「いい感じでしょ」

「黒いシャツにネクタイか」

「それとベストね。ちよつとあつちの筋の人みただけけどね」

「俺に似合うのか」

「似合うわ」

自信を持って夫に告げた。

「今のあなたにはね」

「そうか、似合うか」

「これからは普段はこれ着て」

そのことを夫に伝える。

「いいわね、これからね」

「家の中でもか」

「家の中だからこそよ」

そこを念押しするのだった。あえて。

「いいわね。家の中だからこそ」

「そうか。それなら」

「ただ。運動や寝る間はね」

これについては別のことを言うのであった。

### 第三章

「ジャージでいいから」

「その時はいいのか」

「ただし」

しかしここで。香苗はジャージを出してきた。それは政行が今着ているような野暮ったいものではなくてスポーツ選手が着るスタイルッシュなものだった。

「これ着て。パジャマもシルクを用意しておいたから」

「シルクか」

「そう、シルク」

そのシルクのパジャマも出してみせた。

「それを着て。これからはね」

「何か何でもかんでも派手になつてきているな」

「派手じゃなくてね。コーディネートよ」

またこの言葉を出してみせた。

「コーディネート。いいわね」

「コーディネートか」

「そう。だから」

また政行に対して言う。

「下着もね」

「ブリーフとかじゃないよな」

「ブリーフは駄目よ」

それは一言で全否定だった。

「あれは今時流行らないわ」

「じゃあ何だ。今まで通りトランクスカ？」

「そうだけれどこれもちゃんと選んだから」

出してきたのは今まで身に着けていたものよりも遥かに立派なものだった。生地は同じ木綿でもかなり高級なものになっていた。そ

れを出してきたのだ。

「これね」

「これか」

「シャツも同じよ。これを身に着けて」

「わかった。服もか」

「全部変えるの」

それが彼女のコーデイネイトなのだった。

「中も外もね。これでああなたは全く変わるわ」

「昔みたいになるのか」

「昔のあなたとはまた違うわ」

それは違うというのだった。

「また違うあなたになるわ」

「違う俺にか」

「なるから。楽しみにしておいて」

「楽しみにね。まあそうさせてもらうか」

「お酒もだけれど」

話は彼の飲む酒にも及ぶ。

「今までビールとかだったよね」

「ああ」

彼は今までビールを好んで飲んでいたのだった。しかしそれに対してもコーデイネイトするのだった。香苗のそれはかなり徹底していた。

「それはね」

「どうするんだ？」

「スコッチどうかしら」

彼女が話に出したのはスコッチだった。

「あれかワインにして」

「スコッチかワインか」

「ええ。それでもいい？」

「正直なところ酒は何でもいい」

これについてもやはり潔いものがあった。

「何でもな」

「そうなの」

「だから言っただろう？約束は約束だ」

何処までもそれを言う。まるでそれが絶対であるかのように。政行は言うのであった。

「だから。それでいい」

「スコッチ飲めるわよね」

「少しずつならな」

「ワインは？」

「飲める」

これに対する返答はすぐだった。

「それにあちらの方が太らないか」

「そうよ、それもあるのよ」

実はそこも考えている香苗だった。やはり彼女のコーディネイトは徹底していた。

「それもね」

「そうか。御前本当に細かいところまで考えているんだな」

「だからインテリアデザイナーなのよ」

このことをまた強調して言葉に出した。

「わかるかしら」

「インテリアデザイナーっていうのは厳しいんだな」

「私だけかも知れないけどね。そうよ」

少なくとも自分はそうだというのだった。

「私はね」

「わかった。じゃあ酒もな」

「家にかける音楽も」

「音楽！？」

「そこまで考えていなかったでしょ」

「ああ」

とてもそこまでといった感じだった。仕事中は音楽はかけない主義なのだ。

「クラシックね。ロックでもいいけれど」

「音楽もあるといいのか」

「ダンディに」

注文がついた。

「それが条件よ」

「ダンディな音楽か」

「例えばワーグナーね」

いきなりまた随分と何かとある音楽家の作品だった。

「それとかジャズとか」

「ジャズは好きだな」

「じゃあそれね」

「ついでに言えばワーグナーも好きだ」

何気に音楽の趣味がいいのかも知れない。

「それもフルトヴェングラーのがな」

「随分知ってるじゃない」

「基本だ」

平然と言ってみせてきた。

「こんなのはな」

「基本なの、フルトヴェングラーのワーグナーって」

「基本中の基本だ。その世界の人間にはな」

「初耳だったわ。私も勉強が足りないみたいね」

「それは気にしなくていい。とにかくだ」

今度は政行の方からの言葉だった。

「これで決まったな。音楽もな」

「わかったわ。じゃあそれで行きましょう」

「ああ」

こうして何もかもが決まった。三カ月後にはもう彼は見事なナイスミドルの作家になっていた。あまりもの変わりように編集者まで

驚いていた程だ。

## 第四章

「いや、先生変わりましたね」

家に来ていた女性の編集者が彼女にお茶を御馳走されながら言っていた。今彼女は香苗が出したロイヤルミルクティーを飲んでいた。

「それもかなり」

「そうですね？」

「ええ、変わりましたよ」

このことをまた言う編集者だった。見れば彼女は三十代半ばといったところだ。

「全くの別人です」

「昔はあんな感じだったんですよ」

「それは聞いたことがあります」

かつての政行のことについては彼女も聞いていたようだ。

「それでも実際に見ると」

「違いますか」

「正直惚れてしまいそうです」

「あら、でもそれは」

「はい、わかっています」

これはジョークの言葉だ。彼が結婚していることもその相手が今目の前にいる香苗であることもわかっている。それでこんな話を本気でする者はいない。

「私も立派な主人がいますので」

「ですね」

「それでも。本当に先生は」

そのうえでまた政行のことに話を及ぼさせるのだった。

「変わりましたね。作品にも出ています」

「作品にもですか」

「はい」

話はそのことについて及んでいた。

「かなり出ています。ワイルドさが加わりました」

「ワイルドですか」

「今まではバランスの取れた作品でしたけれどワイルドさがなかったんです」

政行の作品の傾向だった。

「優等生的な作品で。もっと野性味が欲しいかなと思っていたら」

「それも加わったと」

「それでいて今までの作風も健在です」

つまりいいことづくめであった。

「非常にいい感じになっています」

「そうですね。それは何よりです」

香苗はにこりと笑って彼女の言葉に応えた。

「主人も喜んでいますね」

「はい。ただ」

だがここで。編集者の言葉の感じが変わった。

「性格も変わられましたね」

「はい」

ここで香苗の顔もまた変わった。少し曇ったのであった。

「これは考えていませんでした」

「そうですね」

政行は今までの野暮ったい性格が消えたのだ。そのかわり一見すれば傲岸不遜で態度の大きな男になっていた。発言もかなり変わっていた。

「俺があこの出版社を守ってるんだ」

ある時インタヴューでこんなことを言っていた。

「所謂用心棒ってやつだな」

これは今までの彼からは考えられない言葉だった。

「御前の願いは聞く！」

ある時はこうも言うのだった。古い付き合いの編集者の頼みを聞

いた時だ。

「喜んで書かせてもらうぞ」

こんな感じに変わっていた。まるで別人だ。こんな夫、父を見て香苗も子供達も驚きを通り越して呆れてしまっていたのだった。

「何かお父さんってさ」

「最近別人みたいよ」

幸一と朝香はこう香苗に対して言うのだった。

「何でこうまで変わったの？」

「お母さんのプロデュースのせい？」

「ええ、そうよ」

少し苦笑いを浮かべて二人の言葉に応える香苗だった。今三人は夕食後のデザートだ。政行はまだ仕事 중이다。それでここにはいないのだった。

「格好よさが戻ったらって思ったんだけどね」

「確かに格好よくはなったわね」

「ああ」

幸一は妹の言葉に対して頷いてみせた。見れば本当に美男美女の兄妹だ。一目見ただけで異性に人気がありそうだとわかる。

「それでもね。何か」

「別人みたいだからな」

「あれね。昔のお父さんのよ」

「昔の!？」

「そうよ」

娘の言葉に答えた。

「昔のお父さんってあんなのだったのよ」

「凄いワイルドだったのね」

「ワイルドっていうかね。一匹狼的でそれでいて人情があつて」

おのろけが入っていた。どうも彼女も昔のことを思っているようだ。

「いい男だったのよ」

「それがあんな何処にでもいる中年になっていたのね」

「長い間に鈍っていたのよ」

こう表現するのだった。

「忘れていたんでしょうね」

「で、確か格好よくする為にコーデイネイトしたのよね」

「そうよ」

娘に対してまた答えた。

「けれどね。本当にね」

「昔に戻っちゃったのね」

「いいのかしら悪いのかしら」

香苗はそれがどうにもわかりかねているようだった。首を捻ってさえる。

「今のお父さんって」

「お母さんはどう思ってるんだよ」

幸一が彼女に尋ねてきた。

「私が!??」

「そうだよ。問題はそれじゃないか」

彼が言うのはそこだった。

「コーデイネイトしたのはお母さん」

「ええ」

これは話の原点だった。それをしたのは他ならぬ彼女だ。これは揺らぎよのない話だ。

## 第五章

「じゃあお母さんが満足していたらそれでいいじゃないか」

「私が満足していれば」

「そうだよ。そのところはどつなの？」

そこを尋ねる幸一だった。

「問題なのはそこじゃない。どつなんだよ」

「そうね。満足しているわ」

少し考えてから述べてきた。

「実際のところね」

「だったらそれでいいじゃない」

「そうね」

幸一だけでなく朝香もそれに同意してきた。

「お母さんが満足しているのなら」

「予想外のことになってもね」

「予想外の状況になってしまうこともあるけれど」

「春香はその言葉を聞いて言つのだつた。これは仕事からの言葉だつた。」

「それがかえつて満足の行く結果になることだしね」

「そういうものだよ」

「満足しているのならね」

「わかつたわ。じゃあそれでね」

ここで彼女も完全に納得したのだった。自分の中で。

「いいとするわ」

「そうね。格好いいお父さんになつたし」

「春香はそれで満足していた。」

「これでいいわ」

「ただ。どうにもね」

幸一は苦笑いになっていた。

「あのお父さんには中々馴れないものがあるね」

「おい、どうだ?」

そしてここで。その政行の言葉が出て来たのだった。

「今夜は。俺が作るうか」

「あつ、噂をすれば」

「出て来たよ」

春香と幸一は父の言葉を聞いて声がした方に顔を向けた。

「何がいい?俺は豆腐で何か作るつもりなんだがな」

「あなた」

見れば青いシャツに黒いズボンを着たスタイリッシュな格好の政行がいた。髪型も奇麗に纏めている。それを見れば本当に変わったことがわかる。

「和食でいいな。どうなんだ?」

「あなたが作ってくれるの」

「駄目か?俺の料理は」

「いえ」

香苗はそれはいいとしたのだった。にこりと笑って頷く。

「よかつたら御願いますわ」

「わかつた。じゃあ作るぞ」

「ええ、御願い」

「それと鯖だ」

彼が次に出したのは鯖だった。

「鯖は刺身にする。いいな」

「鯖のお刺身!？」

「大丈夫なのかな」

子供達は鯖の刺身と聞いてどうにも微妙な顔になっていた。鯖といえはあたる危険もある、彼等もこのことをよく知っているのだ。

「安心しろ、鯖の新鮮さを見分けるのは得意だ」

だが彼の自信は完全なものだった。磐石の地盤さえそこにはあった。

「だから任せる。いいな」

「どう思う？春香」

「どうかしら」

春香は兄の言葉にどうにも首を捻るのだった。

「けれどお父さんがやるって言ってるんだから」

「別にいいか」

「いいのか」

「お母さんはどう思うの？」

「いいわ」

にこりと静かに笑っての言葉だった。

「御願いするわ。それじゃあ」

「よし、じゃあ任せる」

妻が言うのなら決まりだった。政行もそれを受けて会心の笑みを浮かべてみせる。

「腕によりをかけて作ってやるからな。天才の俺の料理をな」

「天才って」

「何かお父さん本当に変わったわね」

「ひよっとして私」

そんな夫と子供達の言葉を聞いて。香苗は言うのだった。

「コーディネイトしたのじゃなかったのかも」

「コーディネイトじゃなかったの」

「むしろ昔に戻したのね」

今彼女が言うのはそれだった。

「昔のお父さんに戻したのね。けれどそれは」

「それは？」

「私が気付いていなかったのかも。お母さんがこうするって言ったらね」

「ええ」

「それに全部潔く頷いてくれたから。お父さんはお父さんだったのね、ずっと」

「そうなの」

「多分。ただ」

けれどここで彼女はまた言う。

「そうだったのはお母さんの動きからかしら。お父さんが元に戻ったのは」

「半分半分でしょ」

春香は言った。

「その辺りは。お母さんが動かなかつてもお父さんが動かなかつてもそのままだったよ」

「そうなるのね」

「その辺りはね。そう思うわ」

「だろうね」

幸一もそれに頷く。

「コーディネイトって言っても相手があつてのものだしね」

「そうね」

子供達の言葉に頷く。頷けば今まで見えていないものにも気付いた。気付けば何か気持ちが悪落ちていて尚且つ温かいものになってくる。それを心の底から感じて嬉しい気持ちになる香苗だった。その後ろでは政行が包丁を持ってもう鯖を切っていた。

コーディネイト 完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8053e/>

---

コーディネイト

2010年10月8日15時14分発行